

株式相場の牽引役は、世界景気回復を追い風としたハイテク株

2009年12月22日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

株価上昇も出来高は少なく、年末休暇モードへ

米国株式相場は、アナリストによる個別企業の投資判断の引き上げなど、個別の好材料に支えられて、米国株式相場は続伸しました。中でもNASDAQは、テクノロジー関連株の上昇が寄与して、年初来高値を更新したほか、SOX半導体株指数も大幅高となりました。また、医療保険制度改革法案が24日に上院を通過する見通しとなったことに関連して、医療保険会社への課税を1年先送りすることが盛り込まれたことから、医療保険関連株を含むヘルスケアセクターも軒並み上昇しました。

アナリストによる個別企業の投資判断の引き上げが好感されて、株式相場を押し上げました。米アルミ大手については、アルミニウム価格は2010年前半まで上昇が続くとの見通しを示した上で、アルミ価格の上昇が収益増につながるほか、コスト削減に伴う収益性の改善が評価されました。また、米半導体大手については、パソコンなどの最終需要の改善を背景に、来年は収益が上振れる可能性が高いとの見方を示し、株価出遅れ感から見直し買いのチャンスであると指摘されました。

株式相場は堅調な地合となっていますが、週末に米国東部を襲った大雪の影響で小売店での客足が鈍るなど、小売業界にとって重要な時期での天災に、年末商戦への影響を懸念する見方も広がっています。

外需関連株中心に堅調に推移する中、大引けにかけて先物主導で大幅高

国内株式相場は、円安ドル高を好感して、輸出関連株が上昇を牽引し、小幅高で寄り付きました。朝方は銀行などの一部の銘柄を除いて、外需関連株中心に幅広い銘柄が前日比プラスとなっており、ほぼ全面高の状況でしたが、まもなく上昇が一服すると、下落に転じる銘柄も散見されて伸び悩む場面もありました。しかし、円安進行を追い風に輸出関連株が一段と上げ幅を広げて株価指数を押し上げると、株価指数先物にもまとまった買いが入り、日経平均株価は一気に10,300円を越えました。その後は10,300円台前半で方向感の乏しい展開が続いていましたが、大引けにかけて先物主導で買いが入ると、裁定買いも誘い、株価指数は急速に上げ幅を広げました。大引けでの先物の買いは、クリスマス休暇を前に、海外投資家によるショートポジションの買い戻しによるところも大きかったように思われます。結局、日経平均株価は、終値で約2ヶ月ぶりに10,300円台を回復し、本日の高値で引けました。

本日の上昇に最も寄与したのはハイテク株でしたが、その要因のひとつは円安ドル高の進行でした。日銀総裁のデフレを容認しないとの姿勢を受けて、国内では金融緩和策の長期化観測が広がる一方、米国では好調なファンダメンタルズや欧州発の信用不安を背景としたユーロ売り・ドル買いの動きなどから、ドル高基調が続いており、ドル円相場は先月末の安値から+5.5%程度上昇し、10月下旬の水準まで円安が進みました。

米国ではハイテク関連企業の好調な業績が伝えられる中、国内でも半導体大手が積極投資を再開するなど、世界的な景気持ち直しを背景に、ハイテク株を取り巻く環境は好転しつつあります。国内では、円安基調という追い風もあり、株価が上昇する局面では、外需関連株が主導する展開が期待されます。

以上